

宮地嘉六著作集

第三卷



宮地嘉六著作集

第二卷

宮地嘉六著作集 第二卷

一九八四年二月二十日発行

定価 三千円

著者 宮地嘉六 ©宮地彌生子

編集者 宮地嘉六著作集編集委員会

発行者 宮嶋 秀

印刷所 株式会社 開明堂

製本所 株式会社 松本製本所

発行所 慶友社
東京都千代田区駿河台三の七 荻野ビル
電話(一九三)八九八三

凡 例

一、本著作集の収録文は、原則として著者の単行本を底本とし、初出及びその後の刊本と校合した。著者書き入れ本のある場合はそれを参照した。単行本未収録の著作は初出によったが、収録されている著作でも特に初出によった場合がある。それらの異同などは「後記」に注記した。

一、収録文は、底本に忠実であることを原則とし、仮名遣い・送り仮名・著者固有の表現などはそのままとした。ただし、漢字は新字体に改め、明らかな誤字・脱字・句読点の欠落などは適宜加除訂正をした。

一、振り仮名は、総ルビの文も含めて難読・特殊な読みなどの最少限にとどめた。

目 次

放浪者富蔵……………3

時計と清吉……………59

竹本一座……………66

適齡前……………71

悪夢の思ひ出……………85

観劇会……………93

裏切られた人々……………101

河畔……………131

赤シャツの仲間……………136

生活の沼……………171

青い狸……………224

豆腐屋の笛……………242

第一号 檻房にて	266
橋本氏の半生	298
後記	327
大和田茂	

宮地嘉六著作集 第二卷

監修 小田切秀雄

編集 堀切利高

森本修

黒古一夫

宮地彌生子

大和田茂

印刻 宮地嘉六

放浪者富蔵

一

富蔵は七月末の或る朝東京を立つて、丁度土用に入つたばかりの真夏の日に照りつけられながら、仕事衣の青服を着て草鞋ばきのみじめな姿で、東海道を辿つて行つた。旅費と云つては東京を立つ際に友達から一円饒別を貰つたのがあつたが、静岡の市街へ著いた時は二錢銅貨が一つあつた。それで何を喰べようかと考へながら静岡の市中を見て通つたが、ふと道ばたの甘酒屋を見つけたので、それを一杯だけすゝり込んだ。これがいよく最後の二錢だと思ふと名残惜しいやうな心細さを感じた。一杯ぐらゐの甘酒では腹に少しもこたへがなかつた。それに、まづい甘酒だつた。彼は其朝、江尻の本賃宿で朝飯を喰べたきりだつたのである。

丁度午後二時頃で、市中はかん／＼日が照りつけてゐた。街の商店は大抵白や褐色の日覆をかけてゐた。日傘をさした子守や、担ひ商人の影法師が疎らに、ものうげに午さがりの乾ききつた町筋を黒点になつて動いてゐた。夏の真昼の静かな小市街の趣きであつた。富蔵は空腹のせるか、歩いてゐると眼がぼうとなつて來たので、何処かでひと憩みしたかつたが、神社でも見つからない限りは憩むわけには行かなかつた。

製茶機械をこしらへてゐる鉄工場が街の所々にあつた。こんな土地で心から働いて見る気はなかつたが、今はそんなことを云つてもゐられないと、思ひ切つて試しに其の一つに入つて行つた。使つて貰ひたいと頼んで見た。

「今此処はひまでなあ、職人を減さうかと思つてゐるくらゐだが、お前まへえ何処から来たんだね。」と職長らしい男は富蔵の様子を見て云つた。

「東京から来たんでございますが。」と富蔵はありのまゝを云つた。

「あつちは今忙しいだらうになあ、何でもまた出て来たのだい。」

「いえ、あつちも矢張不景氣なんです。」と富蔵は云つたが、実は不景氣の爲めに東京を出て来たのではないので、幾分氣まづかつた。事実は此の職長の云ふ通り、東京の鉄工場はそれほど不景氣ではなかつたのだ。一人や二人の職人は何処の工場だつて使ひ道のないほどに不景氣な時節ではないのであつた。唯彼の心がけが間違つてゐるばかりに、何処の工場でもおいそれと易く雇つてはくれなかつたし、また彼と云ふ男は、雇つて貰うても長続きがしなかつた。東京でも三田あたりの鉄工場は大抵一度はあたつて見たし、石川島造船所にも入つて働いて見たが直ぐいやになつてやめてしまつた。と云ふよりも、それとなく暗にやめさゝれたのである。彼はまあ一口でいえば怠惰者であつた。工場と云ふ処がつく／＼彼には厭やなのであつた。然し窮すれば工場に身を売り込むより他に方法のないことはあまりに分りきつてゐた。それでゐて彼は到る処で辛抱出来ないのである。直ぐ厭や氣がさすのが癖である。いやだとなると一日でも忍んで働くことが出来ない性質だつた。で前後の考へもなくやめてしまふ。若くはもしやめさゝれることになるのだ。今度こそはどんなに厭やな工場へでも我慢して働かねば

ならぬと窮した果てにはさう思ふのだが、いつも結果は同じであつた。で工場でなしに何処か勤め口はないかと、東京にゐる間いろ／＼職業を探して見た。終日万年筆でも動かして、旋風機に吹かれながら、汗臭くならないやうな職業が望ましかつたのだが、それは無論彼の空想であつた。都会は彼のやうな労働者にペンを持たせるほど人材に窮してはゐなかつたのだ。

「矢張働くなら関西が好い。」と彼は思つた。何処へ行つたとて大した変りはないのだが、病的な飽つぱい変質性の彼はさう思ふと忽ち東京にゐるのが厭やになつた。関西にゐる時分は東京で働くなら一生職工で暮しても好いと思つたほどだつたが、その幻影はすつかり亡びてしまつたのだ。

で一先東京を落ちのびる氣になつたのもその為めであつた。仲間とはめたが誰が何と云つても其の通りにせずにはゐられないのが彼の癖であつた。仲間はとめたが誰が何と云つても其の

「東京では何処の工場に働いてゐたんだねえ君は。」と苦勞人らしい職長はいろ／＼そんなことを訊ねた。

「石川島にゐました。」と富蔵は石川島と云ふ工場は大嫌ひであつたが、こんな場合は意氣地なくひとりでにさう云ひたくなつた。少しでも名のある、大きい工場に働いてゐたと云ふことは田舎へ行つては幅がきくので誇らしげな氣持で云ふのが彼等職工の常である。

「そんなら、此の少しさきへ清水てえ工場があるから、其処へ行つて見るが好い。わしがさう云つたと云つてなあ……ひよつとすると都合好く行くかも知んねえ。まあ行つて見るが好い。」と職長は云つた。

「ありがたうございます。」富蔵は思つたよりも親切な人だと感じた。然し此の職長だつて三日も一緒

にゐれば俺は癪にさはつて屹度喧嘩をするかも知れぬ。と思ふと此まゝ別れるのが仕合せのやうな氣もした。かうした最初の親切をありがたく保存する為めには此の人に使はれることを避けた方が安全だと思つた。彼はお辞儀をして別れた。

其処から一丁ばかり行くと、矢張同じ製茶機械をこしらへてゐる鉄工場があつた。富蔵は入つて行つた。氣づまりな随分狭ぐるしい、きたない工場であつた。彼はこんな工場で三日でも働いて見る氣はしなかつたが、余儀なくされた氣持で職長らしい男に会つた。使つてくれと頼んでゐる半面には、「俺はこんな土地までわざ／＼来て旅費をこしらへる位なら、東京の町工場でいやでも働いた方がましだつた」と考へたりした。「どうか雇ふと云つてくれなきや好いが……」と思つた。其癖、頭をひよこひよこ彼は下げて頼んだのである。

「旋盤師は今いないが、お前え鍛冶場のさきでてもやつて見る氣はないかね。さきでが出来れや当分やつて貰つて好いがな、其の方なら今手がたりねえんだ……。」と工場主は云つた。

「さきでてもやります。ぢや其の方でもようございますから使つていたゞきませう。」と彼は云つた。兎に角何かやらしてさへくれゝば現在迫つてゐるひもじい目をどうにかのがれることが出来ると思つたので。

「それぢや、まあやつて見るが好い。」と工場主は早速彼を雇つてくれた。富蔵は旋盤師だつたが鍛冶場の仕事はまんざら覚えがないではなかつたので、久しぶりにハンマを振つて見たいやうな氣もしたのだ。其の僅かの興味が起つたのは此の場合彼の為めには仕合せであつた。

主人は彼を裏の鍛冶場の方へ引つ張つて行つた。其処は思つたよりも広い鍛冶場で、幾つかの火床

は焰を上げてゐた。ハンマの響きと石炭の煙と、火花に照らされた沢山の黒い顔とがごた／＼して忙しげに見えた。彼の大嫌ひな、それは肺にひどく害をすると云ふので大嫌ひな生々しい泥炭の硫黄臭い煙が渦を巻いてゐて、直ぐに彼の喉へ舞ひ込んだ。職人達は皆すつばだかをやつてゐた。田舎の小鉄工場で働く職工は見えもへちまもないだけにぶざまで、ズボンもはかないでお尻をむき出しに、帆布綿の前掛一つで働いてゐるのであつた。まるで修羅場のやうである。火床の焰を背景にして、汗みどろになつて氣負ひながら職人達はハンマを振つてゐる。今まで長い旅路を歩いて来た富蔵はさすがに最初は少し氣おくれがした。まご／＼してゐる自分が見すばらしくて所在ない感じがした。此のまご／＼することは知らない工場へ飛び込んだ場合に最もいけないことだ。直ぐ素人か半ば職人位に見られてしまふのである。で、彼はなるたけ氣を落ち著けた。

鍛冶場の職人達は、風変りの草鞋ばきの渡り者らしい、寝れた職人が一人舞ひ込んで来たのでそれ／＼振り向いた。其の目には輕蔑の色と、古顔らしく見せかけようとする傲慢さが宿つて見えてゐた。渡り者と見ると、小僧までが生意氣な口のききかたをしたがるものだ。

富蔵は内心思つた。此処らの田舎の小つばけな工場で働いてゐる職人等の腕は、大抵知れたものと云ふ氣がした。彼は佐世保の工廠で十三の時、始めて見習職工になつて、三四年鍛冶場の小僧で追ひ廻はされて育つたので、ハンマを振るくらゐのことに大してひけを取らぬ積りだつた。尤も長い間ハンマを振るやうなことはなかつたが、田舎の鍛冶場で出来上つたお前達のぶざまなハンマの振り方とは違ふ筈だと云つたやうな自慢氣さへも起つてゐた。さうした自慢氣でもなければ到底やつて見る氣にはなれなかつたに違ひない。

「おい、ちよいと、若いの、一つ叩いて貰はう……。」と大火床の前の横座（これは火作り師とも云ふ）が手招きした。で富蔵は直ぐあり合はせのハンマを取つてそれに応じた。

然し駄目だった。何故か思ふやうにハンマは云ふことを聞かなかつた。それは五十里余も歩いて来て、而も空腹だったので、第一脚がふらついて其の爲めに身体の方がハンマに負けて少しもきまらないのである。小僧の時分でさへ大場所では片腕でビュ／＼振つて見せて大人の職人と振りつくらをして負けなかつたほどの、高が中つ頃のハンマが此処では、からきし思ふやうに行かないのだ。しばらくやらないせゐもあるが、振り卸すたんびに、あてびしの頭を打ちそこねて横座に氣の毒で恥かしかつた。横座もちよつと顔を顰めた。こいつは使へさうもないと直ぐ思つたらしい。他の大勢のさきで等まで嘲り半分に笑つて、何か陰口を云ひ合つてゐた。

「あの調子ぢや今にカナシキをおつ砕いて人にけがさせらあ……。」

「しろうとだなあ。あの腰つぷりを見ろよ。」

「旋盤師だによ……。」

「道理で……。」

あたりの奴らは聞えよがしにそんなことを云ひ合つてゐた。富蔵はすつかりてれ氣味でぼうと目がくらんでしまつてゐた。

「チエツ、駄目だ……めんだう臭い。こんな処で鍛冶場のさきでをするよりは、乞食をしても歩いた方がましだ……。」と彼は急に氣が變りがけたが、それでもまて／＼と思案しい／＼二時間あまり、まづいハンマを振つて働いた。が、とう／＼投げてしまつた。

「折角やらして貰ひましたが、どうも長旅で疲れてゐるものですからうまく行きません。これでおひまを貰ひます。」彼は工場主へさう云つた。

「さうかね、ぢや仕方がねえ。」と主人の方でも今は止めなかつた。富蔵はざつと手や顔を洗つて、他の職人達にもちよつと別れの挨拶をして鍛冶場を出た。皆は半ば嘲りながらも哀れむやうに彼の後姿を見送つてゐたやうだ。

「ぢやまあ、道中を大事にしてねえ。まだ年も若えから何処へ行つたつて働けねえ身体ぢやねえからなあ。これは少しだけど今夜の宿賃にでもするが好い。」主人は五十錢玉を一つくれた。二時間ほど手伝つた骨折り賃としては過ぎるので、彼はおし頂いて受けた。これだけあれば二日は歩けると思つた。

二

彼は其の日の夕方、藤枝まで行きついた。少しでも多く歩いて置きたいので疲れを我慢して藤枝の先の小さな宿場まで行きついた時は、もう日はすっかり暮れた。宿場の入口には川があつて、橋の上には、色の黒い土地つ子らしい浴衣着の若い衆達が欄干にもたれて涼んでゐた。通りかゝつた彼の姿をじろく見た。何処の国でも夏の夜の気分は同じだと云ふなつかしい感じがした。

富蔵はわけもなく此の時、其れらの土地つ子の若い衆達が羨やましかつた。彼等は自分の生れ故郷の涼しい橋の上で兄弟のやうに仲よしの友達同志と夏の夜を楽しんでゐられるのだと思ふと自分の身が悲しいほどうらめしいのであつた。自分の故郷にも町の入口にはかうした橋があることを思ひ出した。自分はかうした橋の上で同じ年頃の仲よしの友達と夏の夜を楽しむことが出来たら、どんなに今

幸福か知れないのにと思つたりした。此の宿場の町はづれの橋の上で自分も暫く若い衆達と涼んで見たい気がした。然し、此処は自分の故郷とは幾百里を隔てた旅の夏の夜であると思ふと知らぬ旅路を行き暮れた心細さが犇々と感ぜられた。身体が疲れてゐるせるもあるが、ひどくセンチメンタルな気持が胸にしみ出して来る。荒んだ心の奥の方に潜んでゐる、生れつきの女性的な気持が物悲しい旅情を覚えさせるのであつた。其の爲めに橋の上に涼んでゐた若い衆等にまで、わけもなく妙な不安をさへ感じた。彼等が若し気まぐれに何か悪口を浴びせはしないであらうか、そして、少しでもそれに向つて云ひ返したが最後、自分は袋叩きにされるであらう。と云ふやうなとてつもない不安――ひとり旅の渡り者らしい臆病に歸つた。

富蔵の少し先には二人づれの女の旅人が重さうに足を運んで歩いてゐた。二人共編笠を被つてゐたが、富蔵は其の風つきに見覚えがあつた。二三日前、沼津の木賃宿で一緒に泊り合せた法界屋の二人づれに違ひないと思つた。長い旅路を歩く間には追ひついたり、追ひつかれたりして、思はぬ処で一緒にゐるのは懐かしいことだ。二人の女は脚絆をはいて、汗じみた大型の浴衣の裾を端折つてゐる。一人はずつと年増の婆さんで、一人はまだ二十四五の女であることは沼津で見て彼は知つてゐた。草鞋の踵から絶えず後埃を揚げてゐるので脚絆のふくら脛の上まで白くなつてゐた。何処まで行つて宿を定める積りなのか、如何にも無理やりに足を運んでゐるやうな腰つきであつた。それはをかくし身体を振りながら行く。年増の方は風呂敷包を背負つてゐるが、若い方は月琴を背負つて、其の下の腰の方に軽い風呂敷包を巻きつけてゐる。沼津で見た時は婆さんの方が月琴を背負つてゐたやうであるが、何でも代りばんこにとつ替へるのらしい。婆さんの背負つた包みは三味線を三つにしたものであつた。